

「神にはできる」

2015年11月07日

ルカによる福音書 18章 24節～30節。イエスは、議員が非常に悲しむのを見て、言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言うと、イエスは、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われた。するとペトロが、「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」と言った。イエスは言われた。「はっきり言うておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

イスラエル最高法院の議員が、主イエスに「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねた。彼の身なり振る舞いから、豊かさに自己充足し、命を分かち合って生きる隣人を持たず、空しい日々を送っていることを見抜かれた。彼に、持ち物を売り払い、貧しい人々に施し、天に宝を積みなさい。そして、私に従いなさいと言われた。彼は、財産にしがみつき手放すことができないと、悲しみながら立ち去り、議員として、マンネリ化した無味乾燥な生活に戻っていった。立ち去る後姿を見ながら、主イエスは「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」と言われた。大きな財産は人々から収奪することによって得られるという社会構造を知っていたので、金持ちは神の国に入ることはできないと言われたのである。そして「金持ちが神の国に入るより、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と極論で警えられた。

当時、豊かであることが神の祝福に与っている印であると理解されていた。主イエスの逆説的な言葉を聞いて、驚き「それでは、だれが救われるのだろうか」と言い合った。すると、主イエスは、「人間にはできないことも、神にはできる」と答えられた。自分の体を打ち叩いての自己犠牲、自己否定はできることではない。しかし、神が関わる時、可能になってくる。信仰は自分にできるか、できないかを問うことではなく、神がそれをしてくださると信じることである。ここに、真の解放がある。

議員に持ち物を売り払い、貧しい人々に施せ、そして、私に従えと言われた言葉を聞いたペトロは「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」と胸を張った。確かに、主イエスの招きを受けた時、網を捨て漁師職を投げ打って、従っている。マタイ福音書 19章の並行記事では、その後ペトロは「では、わたしたちは何をいただけるのでしょうか」と言ったと書いている。全てを捨てたからには、何かをいただけると、見返りを期待したのである。

主イエスは「はっきり言うておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける」と答えられた。キリスト教信仰は、家内安全や商売繁盛のご利益を求める信仰ではないと、誰もが知っている。しかし、主イエスに対する信仰にはご利益がある。十字架と復活の赦しによって、愛と正義を知らされ、生きる勇氣と力が与えられることである。ペトロは、様々なつまずきや挫折を経験したが、福音を信じ、神の国のために生涯を献げ、殉教した。ペトロは「神にはできる」と信じる信仰によって、意義深い生を全うし、代々の人々に感化を与え、永遠の命を受ける祝福に与っている。